



園木 馨さん「菊池源吾に学ぶ会」会長
菊池源吾に学ぶ会発足当初から、西郷の歴史を学んでいます。

菊池源吾に学ぶ会の会員は、西郷の足跡をたどる中で、島のあちこちに刻み込まれた歴史と逸話を垣間見ます。「奄美の西郷は人間らしい西郷」と安田さんは語ります。島に来た当初、西郷は島民を身分の低い者たちと見下していました。島民たちも、体が大きい西郷を見て、どんな乱暴者かと恐れていたそうです。初めのころは島に馴染めず、すぐに呼び戻してほしいと何度も手紙を書いていた西郷ですが、愛加那と出会い、菊次郎が生まれてからは、「自分も島人になった」と手紙を書くななど、その心情に変化が現れています。

奄美の西郷は人間らしい西郷

で人間づくりができたのではないかと「思う」と続け、奄美が西郷の人格形成において、大切な場所であったらうと話しました。参加者は楠田さんの話を傾け、時折強くなすきながら熱心にメモをとっていました。



①

南洲神社で神前婚を行った重江祐子さんもかけつけ、温かいうどんと黒糖を使った手作りのお菓子でもてなされた菊池源吾に学ぶ会の会員たちは、「こんなにもてなしてもらって驚いた。奄美の人はとても優しいですね」と話すと、奄美ではこのくらいのもてなしは当然と、西郷塾の塾生たちから教わり、さらに驚いていました。

けれど、新居に移転してすぐに召喚状が届き、一人奄美を離れました。安田さんは「奄美の人（特に女性）」は島から出ることを許されなかった。子どもたちも西郷本家に引き取られた後、愛加那は一人、島で暮らし続けた。再び、西郷と会える日を待ち続けると、当時の愛加那が寂しい日々を送ったことを話してくれました。

また、西郷を祭る南洲神社を訪れると、地元で暮らす白久且美さんたちが出迎えてくれました。白久さんは、鯨ヶ浜に打ち上げられた鯨を島民が役人の許可がなく解体できず困っているところに西郷が現れ、鯨の肉を島民に分け与えた逸話を執筆しているとのことと、執筆中の原稿を一部紹介してくれました。



②



③



⑤

- ① 愛加那の美家跡地近くになっていたタンカン
- ② 研究会の後、久保邸で出された郷土料理トビンニャ(貝)やターマ(田芋)、パパイヤ漬けなどが並びました
- ③ 南洲神社で、執筆中である西郷隆盛の逸話を説明する白久且美さん(中央)と菊池源吾に学ぶ会の会員たち
- ④ 西郷隆盛が最初に船をつけた西郷松
- ⑤ 西郷隆盛が愛加那と過ごした家



④

奄美の宝を知ってほしい

菊池源吾に学ぶ会と西郷塾は、平成18年からお互いのまちを訪れ、交流を深めていきました。そして春まだ遠い1月の終わり、菊池市から菊池源吾に学ぶ会の会員が龍郷町へ向けて出発しました。西郷がつないだ橋を渡るように、鹿児島本土から海を越え、飛行機でわずか45分。眼下に広がる屋久島を越えて降り立った空港では、あたたかい拍手と笑顔のおもてなしが待っていたのです。



奄美空港で出迎えてくれた西郷塾の塾生と、菊池市から訪れた菊池源吾に学ぶ会の会員

西郷隆盛に学ぶ

平成19年のシンポジウムをきっかけに、菊池市では「菊池源吾に学ぶ会」が発足しました。西郷の人間性や生き方、その人生とともに生きた人たちに学ぶとともに菊池との歴史的関わりについても見聞を広めようと活動しています。

龍郷町にも、菊池源吾に学ぶ会と同様に歴史を学ぶ「西郷塾」があります。西郷の奄美大島での暮らしや逸話、島妻である愛加那との日々を学ぶとともに、龍郷町の歴史を学び、その深みや重みをつないでいけるようにと活動しています。

苦悩の歴史

龍郷町を訪れた菊池源吾に学ぶ会の会員たちは、西郷塾の塾生たちに案内されながら、奄美大島に散らばる西郷隆盛の足跡をたどっていきました。移動中、車窓からはアダンやサトウ



安田 荘一郎さん「西郷塾」塾長
4年前から公民館講座として行っていたものが西郷塾の出発点。月2回、公民館と塾生の自宅で学習会を開いています。

キジ畑など、菊池市とは違う風景が広がります。島のほとんどを山に覆われ、いまだ図鑑にも載っていないような植物もあるとのこと。自然豊かな島ですが、「日本の中でこれほど征服されたのは奄美だけ」と塾長の安田さんが口を開きます。琉球王朝や薩摩藩などに支配され、また政治的な問題などで島に流れついた人も多く、「日本から切り離されたこともあり、祖国を失った苦悩の歴史があることを知ってもらいたい」と安田さんは続けます。



楠田 豊春さん 奄美郷土研究会顧問
アメリカから日本に奄美大島が返還された当時を知る生き証人

奄美の心

西郷塾は月に1度、塾事務局長の久保明雄さん宅で学習会を開きます。机ではなく肩を並べて対話すること、西郷や愛加那に対する本音を語れるように配慮しているそうです。

菊池源吾に学ぶ会との研修交流会も、この和やかな雰囲気の中開かれました。講師として招いた楠田さんは、参加者に向かい「奄美の宝をぜひ知ってもらいたい」と始めます。「島の言



西郷塾の塾事務局長である久保さん宅で開かれた研修交流会

葉は日本語の古い源流で、奄美には古代の神話みたいなものがある」と続け、奄美の方言が大和言葉の源流であることなどを説明しました。また、薩摩藩に支配されていた時代が、「黒糖地獄」と言われるほど島民にとつてつらいものだったことなど奄美の歴史についても触れます。奄美の歴史から西郷へ話を移すと、「奄美には政治的な問題などで多くの知識人が集まった。西郷の周りにも、知的な人が多くいた影響で、彼の知識もレベルアップしたのではないだろうか」と説明。「奄美に流された3年余りの間、人間的に非常に苦境に立たされている。この間に、島民との関わり